

# 「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

令和元年6月25日  
農業技術課 広域普及指導センター

## 1 生育状況（実証ほデータ）

前年に比べて、草丈はやや長く、茎数、葉齢、葉色は並みとなっている。  
葉齢を揃えて比較すると、草丈、茎数は前年並み、葉色は前年よりやや淡くなっている。  
幼穂形成期は、今後平年並みの気温で推移した場合、前年より1日程度早い7月12日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（6月25日 栽培実証ほ）

年次または 試験内容	ほ場数 (筆)	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期
				(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD	
R元	12	5月13日	40.6	27.9	602	10.1	4.3	41.1	(7/12)
H30	19	5月15日	37.7	26.3	577	9.9	4.4	40.5	7/13
H29	16	5月14日	33.4	26.7	550	9.5	4.4	41.8	7/12
前年比・差		-2	107	106	104	0.2	-0.1	0.6	(-1)
早期田植栽培	6	5月4日	45.4	30.7	658	10.6	4.2	41.1	(7/8)
高品質安定栽培	6	5月15日	38.3	28.2	623	9.9	4.3	39.8	(7/13)

注) R元・平均: 生育観測栽培と高品質安定栽培・対照区(合計12ほ場)の平均  
H30およびH29: 特別栽培米を除く、それぞれ19および16か所の平均

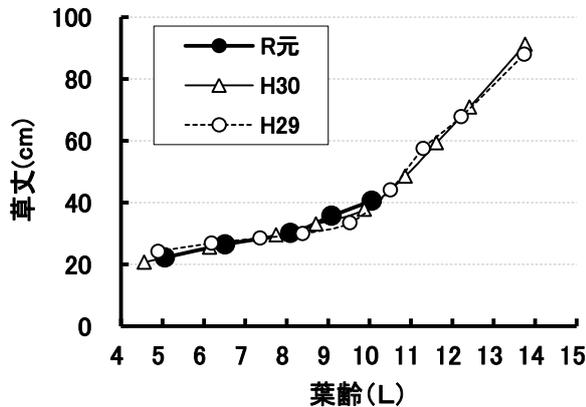


図1 草丈の推移（富富富実証ほ）

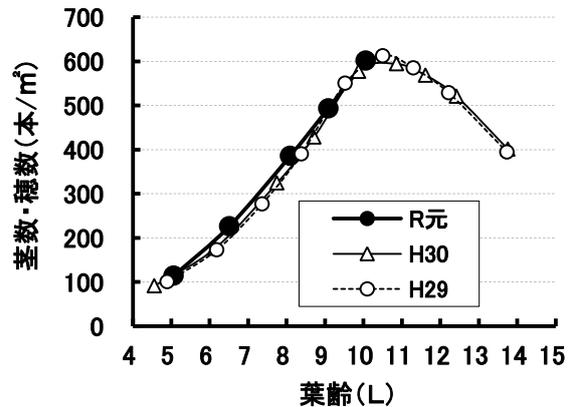


図2 茎数の推移（富富富実証ほ）

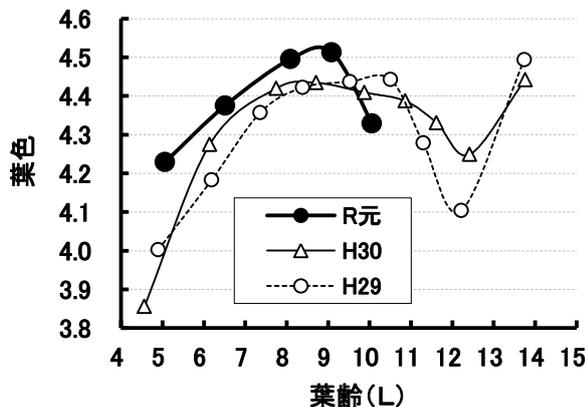


図3 葉色の推移（富富富実証ほ）

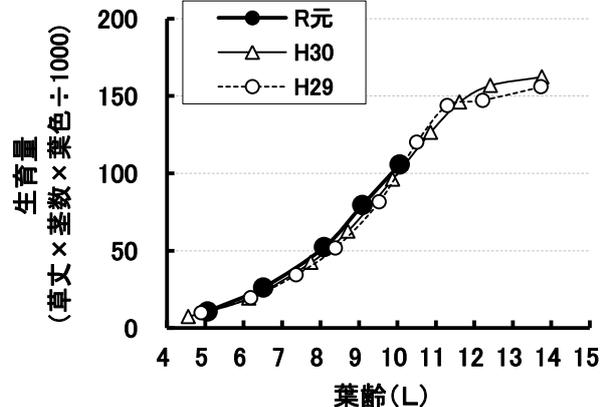


図4 生育量の推移（富富富実証ほ）

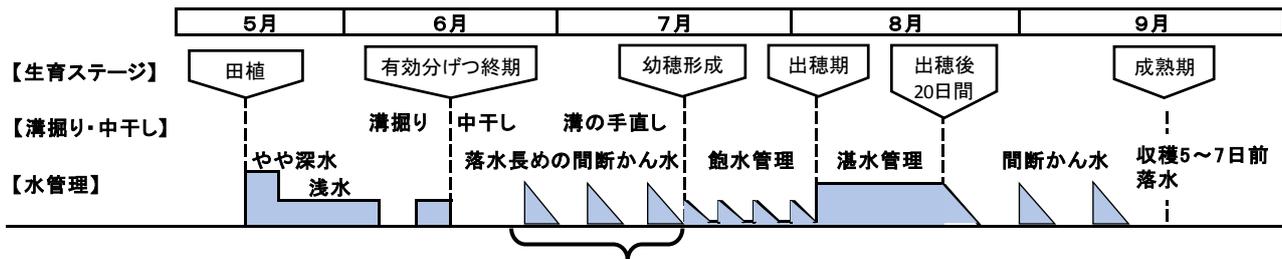
## 2 当面の技術対策

- ・葉色が依然として濃いほ場が多いことから、幼穂形成期までは落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期の SPAD 値 35（群落葉色 4.0 程度）に誘導する。
- ・稲体や根の健全化のため、幼穂形成期から出穂期まで飽水管理を行う。
- ・分施栽培における穂肥は、1 回目を幼穂形成期の 7 日後頃に窒素成分で 0.75 ～1.0kg/10a、2 回目を 1 回目の 7 日後に窒素成分で 1.5kg/10a を基本とする。

### (1) 水管理

- ・葉色が依然として濃いほ場が多いことから、中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期の SPAD 値 35（群落葉色 4.0 程度）に誘導し、適正籾数を確保する。
- ・幼穂形成期から出穂期までは、飽水管理を行う。

#### <水管理のイメージ>



R 元年産「富富富」では、葉色が依然として濃いほ場が多いことから、中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を実施。

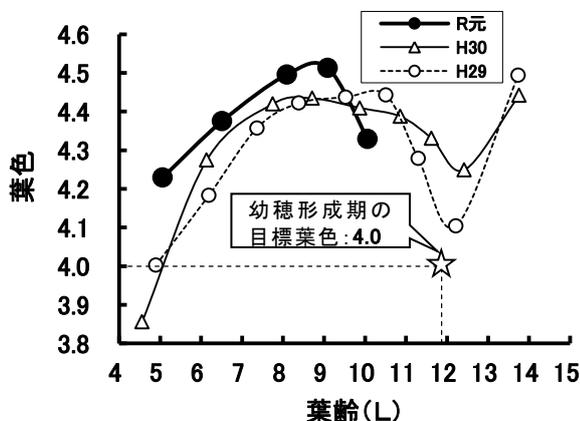


図5 SPAD の推移（富富富実証ほ）

## (2) 分施栽培における穂肥施用

穂肥は1回目を幼穂形成期の7日後頃(幼穂長15mm程度)に窒素成分で0.75~1.0kg/10a施用し、2回目を1回目の7日後に1.5kg/10a施用する。

なお、幼穂形成期の茎数が580本/m<sup>2</sup>以上、またはSPAD値が35(群落葉色4.0)以上の場合は、1回目の穂肥を施用せず、幼穂形成期の14日後頃に窒素成分で1.5kg/10aを確実に施用する。

表2 幼穂形成期の生育の目安

草丈 (cm)	m <sup>2</sup> 茎数 (本/m <sup>2</sup> )	SPAD	群落葉色	生育量	
				SAPD	群落葉色
62	580	35	4.0	125	140

注) 生育量: 草丈 × 茎数 × 群落葉色 ÷ 1000

幼穂形成期頃の施用では、くず米が多くなり、収量が低下。

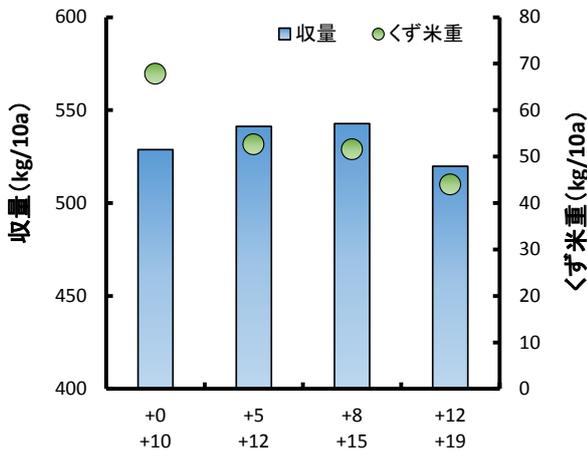


図6 穂肥施用時期と収量の関係 (H30農研)

注) グラフ横軸の数値は幼穂形成期後の日数を示す。  
 施肥量: 1回目 1.0kg/10a、2回目 2.0kg/10a  
 図7も同様

幼穂形成期頃の施用では、乳白・心白粒、青未熟粒の発生が多く、品質が低下。

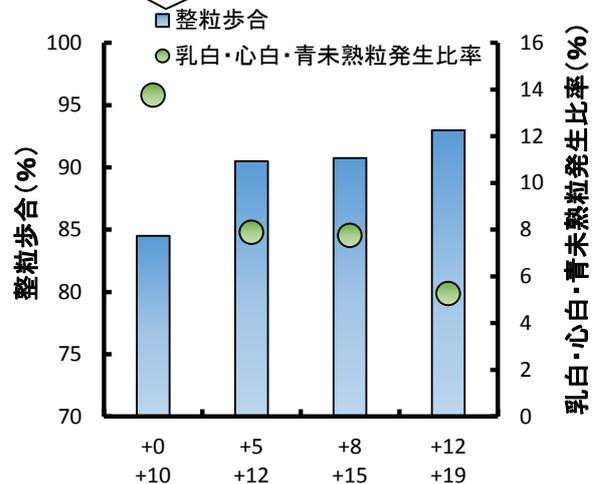


図7 穂肥施用時期と玄米外観品質の関係 (H30農研)

## (3) 病虫害および雑草防除

病虫害および雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通しての化学合成農薬の成分使用回数が12以内となるように留意する。

### ○カメムシ類

- ・ 畔畔等のイネ科雑草の穂は、カメムシ類の好適なエサとなるので、穂が出ないように草刈りを徹底し、カメムシ類の発生量を少なくする。

※ 草刈り運動期間: 7月1日~10日      一斉草刈り日: 7月6日~7日

- ・ 本田内のノビエやホタルイも、カメムシによる被害を助長するので、除草に努める。
- ・ 麦あとほ場において、後作までに日数を要する場合は、雑草の穂が出ないように草刈りや耕起等により管理する。

○紋枯病 ※平年の初発確認日 6 月 23 日 (H30 : 6 月 25 日)

- ・前年多発したほ場で箱施薬剤を施用していない場合は、出穂 3~4 週間前 (粒剤)、または、品種ごとの散布適期 (粉剤、液剤等) に防除を確実に行う。
- ・その他のほ場では、要防除水準を参考にし、必要に応じて適期に防除を行う。  
※「富富富」の要防除水準は「コシヒカリ」に準じる。

表 5 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品種	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)	要防除水準 (発病株率)
コシヒカリ	出穂 10 日前頃	15%